
恋愛競走

梶原ちな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

恋愛競走

【Nコード】

N7817A

【作者名】

梶原ちな

【あらすじ】

子どもだと思ってバカにしていた幼なじみのアイツから勝負を挑まれた。あたしはあんなヤツに負けるわけにはいかない。

***第1話(前書き)

はじめまして、こんにちわ。

またもや短い連載になる予定です。

いつもとは違いドタバタした恋愛小説になると思われます。

会話文などで記号を多く用いていますので、読みにくい方、不愉快に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。

申し訳ございません。

ご感想、ご意見伺えたら、と思えますのでどうぞよろしく願います。

***第1話

負けるわけには、いかない。

だかだかと激しい音を立てて、あたしは廊下をひた走る。
わき目もふらず、ただ、前だけを見て。

放課後といってもあたりはすっかり暗くなってしまつて、月明かりだけが頼りになっていた。

だれもいない。

静まり返つた廊下。

普段、廊下を走るなんて考えられない。

どちらかといえばあたしは優等生で、マジメに生きてきたから。

なのに、こんなに必死になつて走っている。

もうだれもいない放課後。

夕闇が、彼が背後に迫り来るのを感じながら。

「コラ！ちよつと待て！」

「待てといわれて、待つわけ、ない、でしょうが」

差しかかった階段を二段抜かしで駆け上がる。
自分にこんな体力があるなんて思わなかった。

火事場のバカ力。実際経験してみなければわからないものだ。
人間、やるときはやるものなのだ。と改めて思い知らされた。
それが後ろのアイツのおかげだとは思いたくないけれど。

「おまつ、陸上部でも入れ！」

「ア、ンタを振りきったら、そうさせても、らうわよ」

人に陸上部を勧めておきながら、自分だってしっかりあたしのス
ピードについてきている。

これが男子と女子の差。

そうだ。あたしはもう彼にかなわなくなっている。

それがこんなにも胸を締め付けるだなんて、思いもよらなかった。

**第2話

「なに、泣いてんのよ」

「だってよ、こんなにかわいそうなんだぜ。お前はコレを見てもな
んとも思わないのかよ。魔性の女だな」

「バカじゃないの。そういうときは冷たい女だっていうの。頭の
悪い奴が頭の悪い本読んでるから、変な言葉しか覚えられないのよ」

家がお隣のアイツは、小さい頃から涙もろくて、感情のままに生
きる子どものような男だった。

あたしは、真逆。

感情をむき出しにするなんて、子どもみたいでできやしない。

感情を抑えてこそ、一人前の人間なのだから。

「アタマの悪い本って、どーいう本のことですかー？」

「おばさんがこの間言ってたわよ。ベッドの下の大量の……」

「あのババア！ ゆいに、んなコト報告してやがんのか!？」

「もう少し無い頭使って隠しなさいよ、バカ」

ため息をつけばシアワセが逃げるとかなんとかいうけれど、あた
しのシアワセなんてコイツが隣に引越してきた日からもう無いに
等しい。

あたしの人生は、このバカに振り回されてばかりだ。

反面教師という言葉があるけれど、まさにあたしはこういう人間
にだけはなるまいと決めていた。

今日も勝手に家に上がりこんでは、テレビのドキュメント番組を見て泣いている。

高校生にもなって、なんたる情けなさ。

よく、同じ高校に入れたものだと感心する。

「早く帰んなさいよ」

「もう結依のおかーさんに夕飯つくってもらってるからやだ」

「……いつのまに」

「お前が委員会から帰ってくる前にな。いいんちよーオツカレ！」

そうして、あたしはまた盛大なため息をひとつ。

あたしのお気に入りのクッションを抱きしめたまま、彼はニヤッと笑った。

「泰斗くん、結依、ごはんよ」

「はあーい」

下から聞こえたお母さんの声に真っ先に反応したのは泰斗。

バカがバカみたいな声を出して返事をしたものだから、あたしはコブシをつくって彼の頭にたたき落とした。

「いってえ！なにすんだよ！」

「うるさいのよ。近所に迷惑でしょうが」

「近所って、もういまさらだろ。みんなわかってくれてるよ」

「そういうのが嫌なの。アンタもいい年なんだからもっと落ち着きなさいよ。友達のタカユキくんだって彼女が出来てからずいぶん変わったじゃないの」

腕組みをして、泰斗に説教をかます。

これもいつものことだけれど、今日ばかりはどうも様子がちがった。

友達の名前を出した瞬間に、泰斗の目がまっすぐあたしを捕らえた。

「お前、なんでタカユキの彼女しってんだよ」

「有名じゃないの。あんなに整った顔をしているのに、浮いた話のひとつもなかったタカユキくんだもの」

泰斗がなんだか怒っているように見えて、あたしは声を落とした。

「なによ。なんで怒ってるの」

「別に怒ってねえよ」

うそ。

どこからどう見たって、あからさまに怒っている。急にそらされた目は、もうあたしのことを見ない。

「怒ってるじゃないの。なんなの、はつきり言いなさいよ」

彼に向けて伸ばした手。

けれど、肩に触れる前にその手を強くつかまれた。

「お前、タカユキのこと好きだったんだろ」

「なに、いつてるの」

つかまれた手を振りほどこうと力をこめたのに、まったくいいほどびくともしない。

なにこれ。

こんなに力強かったの。

どんなに引つ張っても、ちっとも手は離れなかった。

腕相撲も、徒競走も、勉強も負けたことなんて一度も無かった。

あたしは泰斗より上で、泰斗はヘラヘラしながらあたしの後ろにいたはずなのに。

なによ、これ。

「タカユキがそんなにいいのかよ」

「なんで、そんな話になってるのよ。あたしは一度だってそんなこと」

「俺に隠しておけると思ってたのか」

瞬間、振りほどこうともがいていた手を引き寄せられた。

バランスが崩れて、彼のほうに傾く。

近づく、顔。

近づく、くちびる。

「バカバカってお前はいうけど」

彼のくちびるがすんで、止まった。

「なめんなよ」

手を離されて、腰からくだけた。

ぺたりと床にしゃがみこんで、あたしは呆然と彼の後ろ姿を見送った。

恋愛競走

***第3話

気まずい夕飯を終えて、そうそうに布団に入った。

つかまれた手が、まだじんじんと疼いている。

わけがわからなかった。

あたしは彼よりも勝っていたはずで、なのになわなかった。

それにタカユキくんのことそう。

あたしがタカユキくんを好きだなんて、どうしてそんなことを思ったのだろう。

近づいた顔。

吐息が、顔をかすめた。

泰斗の顔が、声はまだ残っている。

「ゆい」

はつきりと声が聞こえたらと思ったら、急にドアが開いてぱたんとしまった。

こんなデリカシーのカケラもない行動はヤツにしかできない。

「……勝手に、入ってこないで」

「結依、さっきは、その、ごめん」

あたしは布団から顔も出さずに、その情けない声を聞いていた。いつもの彼だ。

「知らない。アンタなんて顔も見たくない」

あたしの気も知らないで。

「ごめん」

「出てっつてよ」

この言葉は、きっと彼を傷付けている。
でも、こっちにも意地があつた。

あんな風にされて、黙って許してやれるほど、あたしは冷静でいられない。

あたしは彼より勝っている。

なのに、このプライドはつかまれた腕の痛みでもろくも崩れ去つた。

「ゆい」

「出てっつて。アンタなんか大嫌い」

たまらず布団から這い出て、目を見据えて言い放つた。

くやしくて涙が出そうだったけど、コイツの前では絶対に泣かない。
い。

あたしは、泰斗に弱い部分なんて見せない。

「俺は、ずっとお前のことが好きなんだよ！」

バカがバカみたいな声を出して、部屋を揺るがす大声でそうどなつた。

「ちょ、なに言ってるの。しかも声、大き……」

「るせえ！ 俺はお前が好きなんだよ！ タカユキタカユキ言いやがって」

「言ってるわいよ！」

「いや、お前はいつもタカユキと俺を比較してんだよ。俺はお前に惚れてんのに、他の男の名前なんか出すな」

好き？

惚れてる？

バカみたいに大きい声でどなるものだから、言葉がアタマで理解されない。

泰斗があたしを好き？

「前言撤回だ！ もう謝らねえ！ いいか、俺はお前が好きなんだ。明日から死ぬ気で追いかけるぞ！ わかったか！」

「か、勝手に何言ってる」

「捕まえたら、どうなるか覚悟してる。逃げるなら、必死で走れよ」

そういつと泰斗はくるつと後ろを向いて、階段を下りていった。残されたあたしは呆然と、またもや彼の後ろ姿を見送る。

「おとーさん、おかーさん！ そういつことなんでよろしくっす！」

バカがバカみたいな挨拶を下でしているのを聞きながら、あたしはばたんと布団に倒れこんだ。

泰斗はあたしを好きらしい。

そんなこと考えたことも無かった。

あたしは泰斗に負けるわけにはいかない。

あたしは彼よりも勝っていないから。
だったら、つかまるわけにはいかない。

バカのバカみたいな告白が耳の内側で響く。
こんな乙女ちっくな感傷はあたしが許せない。

ウルサイ心臓なんか止まってしまえばいい。
この勝負、負けるわけにはいかない。

***最終話

翌日からあたしと彼とのおいかけっこが始まった。

たとえ近所で冷やかされようとも、クラスメイトにからかわれても我慢した。

バカの声は、やはり聞こえていたようだ。

あたしのプライドに火をつけたこと、後悔させてやらなくてはならない。

朝も、休み時間も逃げ切って、放課後。

うまく巻いて家に帰るつもりが、例のタカユキくんに見つかってしまった。

「委員長」

「なに、邪魔する気なの？」

「俺、たいちゃんにあらぬ疑いをかけられて絶交されてるの。で、仲直りしたいんだよ」

モデルみたいにキレイな顔したタカユキくんは、どうやら泰斗の味方らしい。

だからって、あたしだって負けるわけにはいかない。

つかまったらどうなってしまうのか、自分にだって予測がつかないのだから。

「そこ、どけてよ」

彼の横をすり抜けて、あたしは走り出した。

あまりにも簡単に通りぬけられたものだから、なんだか拍子抜けしてしまった。

彼はあたしの邪魔をしにきたんじゃないのだろうか。

「委員長、ごめんね」

長身の彼の後ろには、泰斗の姿。

ニヤッと笑ったヤツは両手を広げて待ち構えていた。

「ゆい！ あんまり走るとパンツまる見…」

「見えるわけないでしょ！ 短パンはいてんのよ！」

そんな心理作戦で、あたしが足を緩めるとでも思ったのだろうか。しかもツメが甘い。

泰斗の横には、上へ続く階段。

あたしはヤツの手につかまる前に、階段を駆け上った。

夕方になって、日も暮れて、それでもあたしは逃げ続けていた。

「し、つつこい！」

「待って、いってんだろ！もう夜だぞ、夜！」

「ア、ンタが追いかけてこなかったら、もう帰ってるわよ！」

しかし、しつこい。
屋上に逃げ込んでも、体育館に逃げても、どこにいたってアイツはあたしを必ず見つけた。

「アンタ！　なんか卑怯な手、使ってんじゃないでしょうね」

「……ご近所さんとクラスメイトが、ケータイでご協力を」

「この卑怯者！」

「てめーが観念すればいいんだよ！　俺の告白を聞いてみんな協力してくれてるんだっつもの！」

告白。

彼の口から、あらためてその言葉を聞いて、胸が熱くなった。

逃げることに必死で、よく考えてもいなかったけど、あたしは告白されたんだ。

しかも、バカみたいな大声で。

「お、なに？　照れてんの？」

「そんなわけないでしょ！」

この動悸は、走っているからで。

この熱さは、走っているからで。

しっかり理由付けされている。

だけど、なのに。

「ちえ、こんなに好きだ好きだっていつてんのに」

その言葉を聞いた足が、何も無いのに勝手につまづいた。

「え」

「あ、つぶねえ！」

かろうじてつまづくのを回避したあたしの素晴らしい運動神経だったけれど、しょせんバカはバカ。

後ろにいたはずのヤツがあたしに手を伸ばす形で、飛び込んできた。

「だいじょうぶなの！？頭うつてない？」

「いつて…え」

仰向けで廊下に寝そべる彼の制服の膝部分は見事に破け、そこからすりむいたところが見えた。

泰斗はあたしをかばおうとした。
本当にバカだ。

あたしが悪いのに、なんで。

「ほ、保健室！ センセイ残ってないか見てくる」

「ゆい」

保健のセンセイを呼びにいこうと、立ち上がったあたしを引き止める腕。

あたしの手首は、がちりと彼につかまれていた。

「つかまえたぞ、コラ」

「そんなことしてる場合じゃ」

「こんなのたいしたことねえよ」

ニヤッと笑った彼の顔を見て、なんだか体の力が抜けたのを感じた。

本気でうれしそうに顔しているものだから、どうしたらいいかわからないじゃない。

ぺたりと床に座り込んで、彼の顔をのぞき見る。

「好きだよ」

「っ、好き好き言わないで。はずかしいから」

「しかたねーじゃん。好きなものはさ」

熱い。

胸も、顔も、つかまれた手も。

走っているせいじゃない。

そんなのとづくにわかっていた。

乱される。

冷静なはずのあたしが、コイツの言葉ひとつに振り回される。

「好きだよ。結依のことが」

「も、わかったから」

「わかってない。俺がこんなに好きなこと、お前は理解してねえよ」

バカだバカだと思っていた。

あたしは彼より優位にあって、そんな風に見られているだなんて思いもよらなかつたのだ。

まったく、どっちが子どもなのかわかつたものじゃない。

あたしは、このプライドばかりにこだわって彼が成長していることに気がつかなかった。

彼だってもう子どもじゃない。

あたしを強くつかんだ手がそれを証明している。

「……子どもだと思ってたのに、ナマイキ」

彼の胸にアタマをのせた。

顔が熱くて、たまらない。

もう、あたしの負け。

見事につかまえられてしまった。

「もう子どもじゃねえよ。だから、結依には負けない」

「アンタに負ける日がくるなんて思わなかったわよ」

熱を持った手は、いつまでも離してもらえなくて。

「好きだよ」

繰り返される言葉。

負けっぱなしじゃ、あたしのプライドがすたる。

「そ、そこまで言うなら、あたしをその気にさせてみなさいよ」

あたしはつないだままの手に、熱をこめて握り返した。

「まかしとけ」

ヤツの返事に思わずかたむきそうになったことは、絶対に言えな

い。

「おとーさん、おかーさん！ ご協力ありがとうございました！」

「ちよ、ウチの親までまきこんでたの！？」

「ご近所のよしみってやつだよ」

ニヤッと笑う彼に、今度こそ本当に負けたとあたしはうなだれたのだった。

**** 最終話（後書き）**

読んでくださって、ありがとうございます。
ご感想いただければ幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7817a/>

恋愛競走

2008年8月29日19時16分発行